
スケッチブック

小松あきひこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スケッチブック

【Nコード】

N2483V

【作者名】

小松あきひこ

【あらすじ】

自殺志願の女と引きこもりの少年が出会い、女の死に場所を探す旅を計画するのだが……

1部

窓の前の道路をトラックが通るたびに、建付けの悪いサッシ窓がガタガタと音をたてる。西側に面した窓から、夕陽が差し込む時刻になろうとしているのだろうか、日差しが傾きかけている。

礼子は、壁に掛った古ぼけた時計に目をやった、時刻は午後3時半を回っていた。ソファーに腰かけて男の電話が終わるのを待っていた。男は、難しそうな言葉を並べて、穏やかな口調で話をしていった。ときおり、専門用語の説明をしたりと、長い電話になりそうである。

礼子は、窓の外をぼんやりと眺めていた。もう、かれこれ20分程も待たされて、うんざりしてため息をついた。

電話を切った男は礼子の前に来て、心にもないお詫びを言って挨拶をした。

「申し訳ありません。お待たせしました」

「いえ……。」

タイミング良く年配の女性が、お茶のお代わりを運んでくる。

「早速ですが……。」

男は、仏頂面で話を切り出した。

「工藤礼子さんでよろしいですか？」

「は、はい。」

「わざわざ、お越しいただきありがとうございます。」

「あ、はい。」

礼子の手のには玄関のドアに挟んであった、一片のメモが握られていた。ここの事務所の電話番号と『内田明君のことで、相談があります連絡してください』の文字だった。そのメモの通りに連絡をして、半ば強引に呼びだされたのである。

「改めて自己紹介いたします。弁護士鈴木広道と申します。」
鈴木は手に持った名刺を礼子に差し出した。

年齢は60ぐらいであろうか、白髪でやせ型、目付きが少し悪いが時々出てくる東北訛りが、雰囲気のを和らげている。しかし、職業柄なのか、語り口は柔らかだが切り込んでくるような迫力を感じるときがある。

「工藤礼子さん32歳。出身は広島県……」

鈴木が一方的に話したすと、それを制するかのように、

「あ、あの！ ちょっと！ なんで？」

礼子是不信感をあらわにして鈴木を睨みつけた。

「これは失礼。大変申しわけありませんが、少し調べさせていただきます。」

「どういことですか？」

身を乗り出すようにして、声を荒げた。

鈴木は、これを待っていたように、

「まー、落ち着いて下さい。大変不愉快な思いをさせて、申し訳ありません。話しの順序を間違えたようでした。」

礼子は、口を尖らせて文句の一つでも言ってやろうと思ったが、話を最後まで聞いてからだ和我慢した。鈴木は、礼子を怒らせるためにわざと話しているから、平然と喋っている。相手の素性を知るためには、怒らせることも必要なのである。

「内田明君とは、いつ頃からの友達で？」

「あ…… 友達と言えば、そうなんでしょうか？ 知り合いたいな……？ で、なぜ私の事を。」

「まあ、まあ……。」

鈴木は少し勿体ぶったように話し始めた。

「私は、彼の亡くなられた祖父の顧問弁護士でした。現在は、遺言執行者として、遺産の管理をしています。」

「遺言……。しっこうしゃ……。？ しっこう？」

（それが、私と何の関係があるのよ？）

礼子は、きょとんとした顔で鈴木を見た。鈴木は、そんなことなどお構いなしに話し続ける。

「私は、明くんの祖父である、大神武社長の若いころからの付き合いで、ずっとお世話になっていました。」

「明くんのおじい様ですか？」

「そうです。半年前にお亡くなりになりました。」

「そ、そうですか。何も知りませんでした……。」

「明くんから、何もお聞きになっていないのですか？」

「はい。」

礼子は、明の顔を思い浮かべた。二人がネットで初めて知りあったのもその頃だった。実際に会うようになって3ヶ月だけど、余計な話しをしない明のことだから鈴木と言う事情などするよしもなかった。

「とりあえず、最後までお聞きください。」

鈴木は、礼子の目を見てお茶をすすめた。

「で、亡くなられる前に社長に呼ばれて、遺言を託されました。」

「遺言ですか？」

「そうです。武社長は、莫大な遺産を残されました。」

「はあ……。」

「大神武社長には、4人のお子さんがいらっしゃいました。その中の一人が明くんの母親でした。」

「で・し・た・？　ですか。」

「遺言の内容は、おおざっぱに言えば。資産と事業は3人の息子さん達へ。亡くなられた娘さんの相続分が実子である明くんへと。明くんの場合は総資産を均等割りにした現金と有価証券になりましたが……。」

鈴木は、礼子の顔を凝視しながら、お茶をすすった。しばらくの間をとって、礼子の反応を見ていた。

「……あの……。」

礼子は、たまりかねて何かを言おうとした。

「まあー、知っていてもいいでしょう。」

鈴木は、独り言のようにつぶやいて礼子に一枚の紙を差し出した。故大神武の相続関係を記した表である。

「先ほど少し触れましたが、明くんの母親が、美智子さんです。」

鈴木は、礼子に渡した紙の黒い線で引かれてある名前を指さした。

「一人娘だったんです。明くんが4歳の時に亡くなりました。」

「そうだったんですか……。」

「あの……。父親は？」

「いたんですが……。父親と呼んでいいものか……。結局、入籍もせず、認知もしないまま行方不明になりましたから……。父親とは呼べないでしょう。」

「そ、そうだったんですか……。」

その後も鈴木は、休むことなく明の身の上話を続けた。

鈴木の話しによれば、内田明の母親である美智子は大恋愛の末に、男と駆け落ちしたという。大神家は地元でも有名な格式の高い家柄であり、厳格な家庭であった。しかも、美智子には、父の武が決めた婚約者がいた。美智子は、父の反対をおしきり、家を追われるように出ていったのである。

その後、美智子は明を産み、ささやかながらも幸せな生活を営んでいた。その幸せがずっと続いていたある日、男は美智子と明の前から姿を消した。

美智子は明を連れて、いくあてもなく親元に戻った。武は、美智子を許さなかった。決して優しく迎えることなく、隣町に住居を用意し親子二人がなんとか生活出来るだけの金を毎月、使用人に持たせていかせていた。

そんな生活のなかでも美智子は明と懸命に生きていた。

2部

その日は明の3歳の誕生日から、一週間ほどたった日だった。美智子は、知ってしまった。

あの男が、美智子と明を捨てて出ていったのは、父の差し金だったことを。それ以来、美智子は父に対する激しい憎悪と、僅かな金のために二人を捨てて出ていった男への憤りに苛まれ続けた。父からの冷遇は止むことなく、誰も味方になる者もない、ただ明を必死に守ることだけで自らを保っていたのだ。

そんな日常が、お嬢様育ちの美智子を壊していった。次第に心を病んでしまった。

どんなに冷静になるように努めても、ときおり襲ってくる激しい憎悪が美智子自身を蝕んでいた。やり場のない怒りが紅蓮の炎となり毎日、毎晩、我が身を焼き尽くす。苦しみと憎悪の連鎖が美智子の思考さえも奪ってしまった。わが子を守りたいと願う気持ちだが、わが子を守るために自身の命を絶ち、この苦しみを承継させまいと考えるようになってしまったのである。

突き抜けるような青空の日、美智子は珍しく上機嫌で大神家へ赴いた。満開の桜の下で明を遊ばせていた。手入れのいき届いた緑の芝で大神家の使用人たちと明が遊んでいる時、美智子は父の書斎で首を吊った。

父への憎悪のあらわれだったのだろう。死に場所を父の書斎にしたなんて。

明は、その後親戚の家をたらい回しにされた。どこの家でも、厄介もの扱いだった。格式の高い家柄が、明の存在を表に出ないようにはしていた。明の行き先をめぐって、伯父達が言い争うこともあったという。最終的に大神武の専属の運転手である内田夫妻が引き取

ることになった。

明は、養子となり18歳までそこで育てられた。今は、一人で暮らしている。

大神武は、生前ほとんど美智子と明の話しをしなかったので、その心情は誰にもわからないが、用意した遺言に明あての財産があることから哀惜の情がうかがえる。

礼子は、途中ボツとしながら、鈴木の話聞いていたが。結局のところ、私に何の関係があるのだろうか？と、不思議だった。鈴木はそんな礼子の反応を確認して、間をおいてお茶で唇をしめらせた。アイコンタクトのあと、語気をやや強めて話しを続けた。

内田明は、心に傷を負ったまま少年期を過ごし、暗い表情のまま高校を卒業した。内田夫妻も本当に献身的であつたが、明の心の氷は決して溶けることはなかった。高校卒業と同時に家を出ると、今のアパートで暮らし始めた。心配して尋ねてくる養親である内田夫妻には、どんな時でも笑顔を絶やすことなく接している。それが逆に明の心の影を感じさせる。

一人暮らしを始めてから、ますます引きこもるようになった。生活費は、明あての遺産を弁護士鈴木が管理しており、毎月一定の金額の振込みがある。特別に必要な時には、申し出れば振込まれるようになっていたが、ほとんど外出しないために、その必要もない。明の暮らしぶりは、規則正しく、清掃もいき届き、アパートの入口の通路から玄関の前までいつも綺麗に掃除していた。毎朝6時に起き、昼食も夕食も決まった時刻にとり、就寝も午前0時には必ずベッドに入っていた。幼い頃から他人の家を転々とさせられた習慣なのであろう。養子として内田夫妻に引き取られたあとも、その頃の体験がトラウマとなっていた。キチツとした手のかからない良い子でいることが安心して生活をする術だと思ひ込まされていたのである。

明は、一日中パソコンに向かっていた。たしかに、規則正しい暮らしぶりであるが、引きこもっていることには変わらない。友達の居ない明にとってはネットだけが、唯一の世の中とのパイプだった。

明は、鈴木の仕事所に必ず2度メールを送る。それは、鈴木との約束であった。

鈴木は明が幼少の頃に2度会っていた。最初は、生まれてまもないとき、2度目は伯父の家に預けられていたとき。養子に入っただけは、月に1度。大神武の顧問弁護士であり個人的にも親交が深かったため、仕事である以上に気にかけていた。もちろん、遺言執行者としての立場と、大神家の顧問弁護士としての職務をも兼ねている。

鈴木は礼子に、一日に2度送られてくる、メールの記録を見せた。「どうぞ、半年前からの記録ですが。……大丈夫ですよ。この通信記録は公開を前提にしていますから。本人も承知しています。」

「はあ……」

礼子は、パラパラとその通信記録に目を通した。メールのほとんどが1行で、朝は『おはようございます』。夜は『おやすみなさい』だった。しかも、毎日計ったように同じ時刻。5ヶ月前、4ヶ月前、3ヶ月前と見ていくと、次第に2行になり3行になり、近況を綴るようになってきた。

「どう思いますか？」

礼子は返事に戸惑っていたが、

「で、これと私がなんの関係があるのですか？」
と、思ったことをそのまま尋ねた。

鈴木は、あらたまって礼子の目を見て切り出した。

「気を悪くなさらないで下さい。まず第一に私どもは、あなたが遺

産を目的に彼に近づいたのでは。と、疑ってました。」

「はぁ――。」

礼子の顔色が変わった。

「それは、大変申し訳なかったと思います。調査をして、また、今日お会いして我々の思い違いだと確信いたしました。」

鈴木は、更に礼子の目を見据えていた。愛想笑いが、まだ疑いの余地を残していることを物語っていた。

「それで、先ほどお見せした通信記録ですが。最近のメールで、あなたと旅行に行く計画を練っていると、書いてあったでしょう。そういう事実は何？」

「あ、はい。たしかにそうです。旅行に行こうと……。まだ計画段階で……。」

鈴木は、ニコツと笑って、

「その件で来ていただいたんです。」

「え！ そのことだったんですか？」

「はい、旅行のことなんですが、これから言う二つの約束を、守ってもらうことを条件とさせていただきます。よろしいですか。」

礼子は、そんなことよりも、遺産狙いで近づいたと思われるということが、腹立たしかった。

（きつと、まだうたがっているわ……）

「二つの約束ってなんですか？」

と、不機嫌そうに尋ねた。

「一つ目は、一日に必ず2度連絡を入れること。電話でもメールでも構いません。二つ目は、その際に何処に居て、次は何処に行く予定なのかを知らせること。」

「そ、それだけですか？」

「そうです。」

鈴木は事務的な態度で、

「では、出発の日時などが決まりましたら、事前に連絡をお願いします。」

「あ、はい。」

「それから、費用は明君が全部出すと言ってますので。」

「あ、いえ。私も、ちゃんと出しますから……。」

（遺産狙いなんかと思われたんだから、お金のことはちゃんとしな
いと）

「いえ、必要な費用は用意いたしますので、使い道を報告して下さい。」

鈴木のたたみかけるような言い方に、少しムツとしながら返事を
した。

「はい。」

そんな礼子を気にもせずに続ける。

「それと、私の個人的な意見ですので、忘れていただいて結構です
が、先ほどのメールの記録をお見せした通り、彼はあなたと知りあ
ってからずいぶんと前向きになりました。あんなに、ふさぎ込んで
いた彼が。私あてのメールでも近況を綴ってくるなんて。今迄なか
ったことです。彼は、あなたと出会い、あなたを通じて変わろうと
しているのでは……と、思えてならないのです。」

鈴木の状態がさっきの事務的な態度から変わっていた。

（このおじさんも、やっぱり優しい良い人なんだ）

「明くんをよろしく頼みます。」

礼子に向かって頭を下げていた。

「はい……。」

礼子は、何かを背負わされたような気がして心が重かった。

（だって、旅の目的地は……。）

礼子と明の計画した旅の目的は……。その目的地は、礼子の死へ
の旅立ちの地だった。

（私の旅の目的は、自殺をするための場所探しなのに……）

3部

6ヶ月前。

礼子は一人、部屋でパソコンのキーボードを叩いていた。玄関には、退職記念の花束が踏みつけられたまま散乱していた。部屋中に、足の踏み場もないほど結婚式の招待状がばらまかれている。

礼子が今、夢中で書き込んでいるのは、自殺支援サイトでの自殺者募集の書き込みだった。

書き込めば、返事が来る。いろいろな反応がある。冷やかしの人、自殺を思い留まらせようと真剣に考えてくれる人、同じ思いで自殺を考えている人など。礼子が待っているのは、同じような境遇の人。どうせ死ぬなら、似たような人と一緒にいい。最後に、少しでも話しを聞いて欲しい……。

昨夜、最後の仕事を終え帰宅してから丸一日中。ほとんど食事らしい食事もとらず。机にうつ伏せてうとうとしていた。目を閉じれば、私を捨てた男への憎悪と、幸せだった日々の思い出が交互に浮かんできた。

結婚が決まり幸せだった。結納も無事に済み、結婚式の日取りも決まり幸せの絶頂だった。職場では、皆が祝福の言葉をかけてくれた。あこがれてた寿退社をすることができる。毎日が華やいでいたのに……。

突然、結婚をやめるといいだした。別れたいと……。

そんなこと、急に言われても……。なんで？ どうして？ もう、案内状も出来てるのよ！ 皆になんて言えば……。

惨めじゃない！ こんなことって……。皆の笑い者になるわ……。死んでやる！ 許さない！

礼子は毎日、死ぬことばかり考えていた。結婚が取りやめになったことも言えずに、皆に黙っていた。職場では、声をかけられる度に愛想笑いでやり過ごすことで精いっぱいだった。結婚式の招待状を送ると嘘をついていた。もう、引き下がれない。と、思う気持ちに追い詰められといった。

（今さら、結婚がなくなりましたなんて……。言えない……。死んでしまえば。誰からも何も言われることもないし、あの男だって、悔いるはずだわ。）

そして、礼子は一緒に死んでくれる、誰かを探していた。

そんな日々の中で、礼子は明と出会った。礼子の自殺志願の書き込みに、明は冷やかしくも取れる書き込みを残した。その書き込みは、『僕は、死ぬつもりはありません。一緒に自殺はしませんが、あなたの死への旅立ちを見届けます。』だった。

（なに、この書き込み？ ふざけてるの？）

礼子は、一体どういうつもりで書き込んだのか気になり、普段なら無視してしまうところだが、返事をしてしまった。

それから、礼子と明のやり取りが始まった。互いにメールで連絡するようになった。そして、一日中メールするようになった。明は、メールやネットでは、同一人物？と、思えるほどに饒舌だった。話題も豊富で学識も深かった。そして、何よりも話を聞いてくれた。ただ、自分のことになると、あやふやに答えていた。

顔が見えない相手だからなのだろう。思った以上に赤裸々に話せてしまう。会うと相手の表情や態度に目がいってしまうものだ。メールなら、相手の素性も知らない。いざとなれば、連絡を絶つことだって簡単だ。それほど、ネットでの人間関係は壊れやすいものなのかかもしれない。しかし、まるで揮発性が強い液体のように瞬時に燃え上がることもある。それは恋愛感情だけではなく、押さえこま

れていた感情があふれ出るように、何かを引きよせ合うように。

礼子と明もその類の一つなのかもしれない。

互いのメールが頻繁になって2ヶ月ほどたった頃、ひょんなことから、会う約束をしてしまった。言いだしたのは明だった。あんなに、人間嫌いだった明は、礼子に対しては、何か違う感情を持つようになった。知りあってから3ヶ月足らずだが、互いの存在がなくてはならないものになっていた。互いに補いあっているような、あるいは同志のような存在である。さらに、電車で二駅ほどの近くに住んでいたことにも、驚かされた。

「ねえ……、明くん聞いてるの？」

明は、相変わらず直接話しをせずに、その都度携帯のメールで返事をする。

「うん、聞いてるけど……。」

礼子は、この不思議な会話方式に、少しは慣れたつもりなのだが。時々、呆れてしまう。目の前に居るのにメールで会話するなんて……。

「ねえ。明くん返事だけなら、メールじゃなくて『うん』と、うなずくだけでいいのよ」

「うん、そうだね。でも、こうやって返事をする方が落ち着くんのだ」
「落ち着く……の……。」

礼子は、つぶやきながら頬杖をついて明を見た。明と出会ってからの月日を回想していた。本当に不思議な少年だった。二十歳になったばかりで、礼子とは一回りも年下。目の前にもメールで会話するような変な奴。そんな変な奴だけど、ここのところ毎日のように会っている。どうしてだろう？

お互いに何の予定もないから……、と言ってしまえばそれだけな

んだけど……。

礼子は、預金と退職金で生活しているし、明はもともとは、ひきこもりだったから、会うことを断る理由もないし、時間だってたくさんある。ただ、会っていても会話はメールだから、明にとって礼子は人間の形をしたパソコンに見えるかもしれない。今迄に出会ったことのないタイプの変な奴だけど。自殺するまでの一時期、ちょっと相手してやるのも悪くないかな。と、思っていた頃を思い出した。

そもその出会いは、礼子の自殺仲間募集に、明が勝手に死出の旅路の見送り人として参加してきたのだ。どうせ死ぬなら、旅をして欲しいと。自殺する目的地に着いたなら、そこで見送って別れると言っていた。今でも、その目的は変わらない。むしろ、そのための準備を着々と進めていたのである。

メールの着信を知らせる振動が手の中に広がった。

「礼子さん、車、見つかった？」

「あ、そうだったね。車……だったよね。」

「そうだよ、礼子さんが探すっていったから、まかせていたんだよ」

「そうだね、ごめんなさい。どんな車がいいのか聞こうと思って忘れてたわ。」

「だと思ったよ。車は、僕がネットで探すから登録は礼子さんだよね。」

「そうね。明くんが見つけてちょうだい。登録の手続きは私でいいわ。」

「礼子さん。ワゴン車でいい？ 運転大丈夫？」

「もう！ 免許取って14年よ！ ペーパードライバーじゃないのよ。ちゃんと運転できるのよ！」

「じゃあ、安心だね。車はすぐに見つけるからね。」

明は、楽しそうに各地の観光案内やロードマップなどを見ていると言っていた。行くあてのない旅、車で寝泊まりをして、あまり知

られていない穴場を探す。

明は、海が好きだった。海水浴場ではなく、岩肌がごつごつとしたところが好きだった。一度も海に泳ぎに行ったことがないと言っていた。親戚中で厄介者だった頃は、いつも留守番だった。学校へ行くようになって、体育は見学ばかりだった。

「だから、僕の中で海といえば…… ビーチじゃないんだ！」

4部

明は自身の生い立ちを、すすんで話すことはなかった。それは時折、会話の中で断片として出てくるものを繋ぎ合わせて知るしかない。礼子にとっては、明の壮絶な幼少期を想像すると、同情の念が湧きおこり優しくしてあげたくなるのだが。明の会話はいつも、その深い悲しみが憎悪となり底知れぬ孤独感に明自身を破壊しかねない衝動を感じる。だからこそ、そのエネルギーに同調しないように、優しくするよりも突き放すことがある。

それは礼子の母性の表れなのかもしれない。明もそれを感じているのか、時に母親にすがりつく子供のように素直になり、落ち着きを取り戻す。

「明くん、本当に楽しそうだね。」

「うん、旅なんかしたことないから。考えるだけでも楽しいよ。礼子さんは？」

「ふーん」

「礼子さんは、楽しくない？」

無邪気な明を見ると、不思議な感覚に襲われる。礼子の死への旅立ちを楽しんでいるようすではないが、本当に『死ねるの？ 本当に自殺できるの？』と、問いかけられている気もする。また、それと正反対に『もう死なないで、旅を楽しもうよ』と、言っているようにも。そして、なによりも明自身がなにかからの救いを求めているようにも感じた。

礼子は、複雑な思いを自らの体内でぐちゃぐちゃに混ぜあわせ、その得たいのしれない合成物に飲み込まれそうになる自分が心地良かった。

怠惰に日々を過ごす、何も感じない日々慣れていくために。死にたいと願う衝動をより確かなものにするために。

明と会うのは、いつも一時間ぐらいが限界だった。平静を装いながらも、何か心が揺さぶってしまうからだ。二人で決めた目的には必要のない何かが……。

そのせいなのか、別れ際には意地悪なことを言ってしまうこともある。

さっきの明の質問に対して、冷ややかな態度を取った。

「ねえ、礼子さん。旅は嫌いなのか？」

「そうね、好きじゃないかもね……」

「そ……そうなんだ……」

「明くんがメールじゃなくて、私とちゃんと話が出来れば楽しくなるかも……」

「……それは、すぐには……無理だよ……」

「じゃあ、楽しくない旅になるね……」

「……なら……ちょっと、頑張ってみるよ。」

礼子は、明の返事が以外だった。あきらかに拒絶するだろうと思っていたが「……頑張ってみる……」の文字に何やら胸が締め付けられる思いがした。この子は、少しずつ変えようと努力している。それに比べて、私は何だろう。いつも、うつむいて逃げてばかりで……。

礼子はしばらく黙って考えていた。いや、明に考えさせられていたのかもしれない。

（この世間知らずの引きこもり男が……。私よりも一回りも年下の子供が……）

「どうしたの急に静かになって？」

礼子は、何だか腹立たしくなってきた。こんなまともな会話一つ出来ない子供に、振り回されているなんて。

「また、明日ね！」

と、言い捨てて。立ち上がった。明は、いつも通り窓の外を見ながら黙ってうなずいていた。

いつものように、礼子が先に立ち去る。そんな風景が、今日だけは変わっていた。

「うん」

明が、かすかに。でも、はっきりと返事した。

立ち去ろうとした礼子の足が止まった。でも、振り返ることなく、右手を軽く上げてバイバイした。うるんだ目を見られないために背を向けたまま歩いていった。

（何でだろう。どうしてだろう。私に何を求めているの……）

翌日、礼子は明からメールに誘われて公園で会うことにした。いつもは喫茶店や美術館などの屋内で会っているのに珍しく外だった。明と待ち合わせしてる公園は、住宅街の中の小さな公園だった。幼児用のすべり台と、これもまた小さなブランコだけの公園。

突き抜ける青空の正午すぎ。平日の人影のない公園のベンチに座り、明がスケッチブックを広げていた。

約束の時刻のずいぶん前から来ていたのだろうか、無心に鉛筆を走らせて絵を書いていた。礼子に初めて見せる姿だった。

礼子は感心しながら見つめていた。

「へー。明くん絵をかくんだね。何をかいてるの？」

明は、携帯をポケットから取り出そうとしたが、スケッチブックを礼子に見せて、

「雲」

と、小声で答えた。

礼子は、その雲の絵を食い入るように見ていた。

技術のことはわからないが、素晴らしいと思った。何かを引きつけるようなものを感じた。人との接触を極端に嫌う明のことだから、誰にも教わったことなどないだろう。なのに、この絵は……。

真っ白な紙に、大空を漂う白い雲。それが、一本の鉛筆で見事に描きだされている。

「すごい。上手いのね！」

明は、なかなか会話が出来ないのか、黙って鉛筆を走らせていた。
「いつから、書いてるの？」

顔を上げて礼子を見て首をかしげた。何かを自分で喋ろうとしているようだった。

「明くん、無理しなくていいのよ。メールでもいいのよ。少しずつでいいから。時間かければいいから……。」

「うん」

と、声にならないような小声でうなずくと、再び鉛筆を走らせた。
「明くん、ありがとう。頑張ってるのね。」

5部

明は無言で走らせていた鉛筆を置き、携帯を取り出した。礼子と会話をするために。

「雲の他は？ 何を書くの？」

「いつも雲だけだよ。雲しか書かない」

「そうなの……。何で雲なの？ こんなに上手だったら、風景とかも書けるんじゃない。」

「雲しか書きたくないんだ……。花や風景も書いてみたことはあるけど。僕には雲が一番似合ってるから」

礼子は明の絵を見ながら尋ねた。

「どうして雲なの？」

「雲を描くことが、僕と似ていると思うんだ」

「明くんと雲が？」

「雲と僕じゃないよ。雲を描くことが……。ね。」

「どういうこと？」

明は、スケッチブックのページをめくり、新し真っ白なページを横に座る礼子の膝に乗せた。

「このページは、真っ白紙だね。それで、白い雲を描くんだ。」

「うん。そうだね……」

「その白い紙に白い雲を、黒い鉛筆で描くんだ。それは、なんて言ったらいいんだろう？ その存在と、まったく逆にあるもの。白と黒のようにまったく正反対のもので、それ自体を浮き上がらせる。」

礼子は、明の言いたいことが何となくわかる気がした。明は、今迄見せたことがないほどの真剣な表情でメールを打ち続ける。

「それは、きっと世の中に受け入れられない存在が。僕のような存在が、浮き上がるためには、そうするしかないと思うんだ。僕が生きていこうとするならば、きっと、その正反対のことでしか僕自身を浮き上がらせる事が出来ないかもしれないから」

「明くん。それってどういうことなの？ 死にたいと思うこと？
あなたは、死にたいとは思わないって言ってたわよね。」

明は無言で礼子を見ていた。

「死にたいって言ってるのは、あなたじゃなくて。この私なのよ。」

礼子は、明の言葉に動揺していた。そして、その姿を悟られないように必死だった。

「あなたは、そんなことを考えちゃだめだよ！」

「うん」

明は、ぼんやりと空を見上げながら返事をした。

（死にたいと言っているのは、私の方なのに……）
複雑な思いだった。

明は、礼子の膝のスケッチブックを取り上げて、再び鉛筆を走らせ始めた。礼子の動揺を感じとりながら、新しページに薄く線を引き始めた。

「礼子さん。いつ自殺するの？」

「え！ いつ？ い、いつって、まだ、少し先かな……。だって、旅があるでしょう……。」

「そうだよ！ 旅をするんだから、まだ、死んだらだめだよ。」

「うん」

礼子は、そう答えるしかなかった。

（私、死ぬ死ぬって言ってるけど、本当に死にたいのかな？ 本当に死ぬ勇気があるのかな？）

「礼子さん、死ぬのは怖い？」

「うん、たぶん怖いと思う。まだ、わからないけど……」

「死んだらだめだよ！ 自殺なんかしないで！」
「え！」

礼子は、明の顔をのぞき込んだ。

明は、いつものように下を向いて携帯を見ていた。

「僕の母親は、僕が小さい頃に自殺したんだ。ちょうど、礼子さんぐらいの歳だった。知ってるよね。」

「うん、弁護士さんから聞いたわ。」

「そうだったね。」

「どうしたの？ 急に……」

「お母さんも、死ぬとき怖かったのかな？ つらくなかったのかな？」

礼子は、明の肩に手を置いて優しくなでながら答えた。

「つらかったんだと思うよ。だって、子供を残してまで死ななきゃいけなかったなんて……」

「礼子さん。死んだらダメだよ！」

明は、礼子の顔を見た。目にいっぱい涙をためていた。礼子も明の健気な訴えに涙が溢れてきた。

「ご、ごめんね明くん。わたし、私。本当は自殺なんかできない。怖いよ……。」

あふれ出る涙がぽたぽたと膝に落ちていた。明の肩に置いた手にギュっと力が入った。

「ごめんね。私、どうしたらいいのか？ あんなに死ぬなんて言ってたけど……。本当は出来ない。出来っこないんだ……。嘘ついたよ。」

「うん。死なないで！」

明が叫んだ。大きな声で。今までに聞いたことがない大きな声で。礼子はうれしかった。本当にうれしかった。

「ありがとう。ありがとう明くん。本当にごめんね。私、いつも強がっていたけど、すごく怖かったの……。」

礼子はあふれ出る涙を拭うこともせず、明の肩にもたれかかっていた。

「本当は……。明くんが死にたいと思っていたんだよね……。ずっと一人で辛かったんだよね。」

明も、目にいっぱい涙を浮かべながらうなずいた。

「だから、死ぬ前にお母さんの気持ちを知らうとしたんだね、お母さんと同じ年齢の私に聞こうと思ったんだよね」

明は、手で涙を拭いメールをうっている。ときおり、涙で指先が見えずに何度も打ちなおした。

「じゃあ！ 二人でこれから生きよう！ 生きるための旅をしよう！」

礼子は、メールをみてうなずいた。

「ごめんね……。」

「もう、ごめんはいいよ。」

「うん」

互いに目を合わせて微笑んでいた。

「それと明日、車屋さんが『連絡ください』ってメールが来てたけど」

「うん」

「車はね。中古車だけど白いワンボックスにした」

「うん」

「もう、泣きやんだ？」

「うん。もう大丈夫よ」

「じゃあ！ 計画を立て直そうよ！」

「うんそうだね。再出発の旅だね。」

「そうだよ」

明は、また鉛筆を走らせ、そして、礼子に見せた。

「ほら、雲の下に山を描いたよ」

「あ、ホント！」

「後は、この絵に加える街を探しに行くんだね。生きるために、生活する街を」

その絵は、ところどころが明の涙でにじんでいた。

「明くん、いつ出発する？」

メールを打とうとする明に笑いながら言った。

「メールは、もういいから。返事しなさい！」

「うん」

明は、しっかりとした口調で返事をした。

涙でぐちゃぐちゃになった二人の顔は、子供のころのように笑顔であふれていた。

空は、雲一つない青空だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2483v/>

スケッチブック

2011年8月2日03時38分発行